

「気前のよい神」

(マタイによる福音書 20:1-16)

ぶどうの収穫は、霜が降りる前に終わらせなければならないので、収穫の追い込みの時期には一人でも多くの労働者が必要です。そのため、主人は何度もでかけて行き、労働者を確保します。夜明け、朝の九時、十二時、三時、そして五時とそれぞれの時間で労働者が雇われ、ぶどう園に送られます。主人は「夜明け組」には一デナリオン、「九時組」にはふさわしい賃金を約束しました。ここで、「ふさわしい賃金」と訳された言葉は、「何であれ、正義であるもの」と直訳できます。この世的な価値基準、「正義」で言えば、その後暑い中を一日労働することになる「夜明け組」が最高額の賃金をもらい、それから時間に応じて賃金が減っていく、というように考えます。しかし、結果はそうではありませんでした。最後の一時間しか働いていない「五時組」と「夜明け組」がなんと同額だったのです。夜明け組が不平を言うのは当然です。しかし、主人はその一人を呼び、「友よ」と呼びつつ、「あなたに不正なことはしていない。」と言います。主人にとっての「正義」とは、労働量に応じた賃金ではなかったのです。「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じようにしてやりたいのだ。」と主人が言うように、主人にとっての正義は、「最後の者」をも同じように扱うことにあるのです。

もちろん、これを人間社会にそのまま当てはめることはできないでしょう。しかし、このたとえば、神がどのような方であるかをわたしたちに教えています。「わたしの気前のよさをねたむのか」と主人が言う通り、神は気前がよいのです。気前のよい神は、ご自分のものから惜しげもなくわたしたちに与えてくださいます。そして神は、「報酬」として救いを与える方ではない、ということです。神からの救いも、愛も、すべて気前のよい神から「恵み」として与えられるものです。「最後の者」であっても、です。今週の福音は「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」と結ばれます。主イエスは別の箇所でも、誰が一番偉いか、と言い合う弟子たちを戒めて、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」(マルコ 9:35 等)と言われます。「先になりたい」と、この世的な基準で「偉さ」を望むものは、後になってしまうのです。この世的な価値基準に捕われていては、本当に大切な神の思いが見えなくなってしまうからです。そうってしまった人間は、「正しく」与えられている賃金にはもはや目が行かず、残るのは不平不満だけです。それでは、労働の喜びも、与えられている恵みへの嬉しさも失われてしまいます。しかし、もしも主人の思い、主人の「正義」に目が開かれるなら、その恵みを喜びと共に受け取ることができます。

働くことの喜びを忘れ、いっそう多くの賃金にばかり目が囚われてしまった「夜明け組」のように、最後の者にも思いを注ぐ主人の「善さ」が見えなくなっていないでしょうか。立ち止まり、あらためて神の正義をこそ、求めましょう。